

(社) 東洋音楽学会関西支部 支部だより
Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music
第 42 号 (2002/01/11)

♣♣♣ 定例研究会のご案内 ♣♣♣

●第 207 回定例研究会

と き：2002 年 2 月 9 日 (土) 14:00~17:00

ところ：神戸大学発達科学部 C-101 号教室

(阪急六甲駅、JR 六甲道駅下車。どちらも神戸市バス 36 系統 (鶴甲団地行き) に乗り、「神大発達科学部前」下車。)

研究発表

(1) 「金井喜久子～生涯と作品について～」

法田 典子 (神戸大学)

(2) 「登場人物の役割と謡の旋律性～能を、平家、文楽、歌舞伎と比較する～」

藤田 隆則 (大阪国際女子大学)

今回は神戸大学大学院生の法田典子さんと、大阪国際女子大学で教鞭をとられている藤田隆則さんの発表です。法田さんには、沖縄出身・東京音楽学校で作曲を学んだ金井喜久子 (1906-1986) について、金井が自らの作品の中で沖縄のアイデンティティをどのように表出していたのかについて、お話いただきます。藤田さんの発表は、ビデオによって具体例を提示しながら、能の登場人物の役割と音楽 (謡) の関係を、他の日本音楽の種目との比較をまじえながら論じていただくものです。

現在、例会発表、および発表のレポート作成をお引き受け下さる人を探しています。是非、例会が会員どうしの積極的な意見交換の場となるよう、多数のご参加お待ちしております。

●第 208 回定例研究会は、4 月中旬、神戸大学にて、内容は卒論、修論、博論発表の予定です。詳細は次号の支部だよりにて通知いたします。

♣♣♣ 定例研究会の報告 ♣♣♣

東洋音楽学会関西支部第 205 回定例研究会報告

(日本音楽学会関西支部例会と合同)

と き：2001年9月29日(土) 14:00-17:30

ところ：京都市立芸術大学・大学会館交流室

テーマ：「ロシア音楽研究の現在」

研究発表

(1) 谷本一之「ロシア先住民族芸能の伝承と調査研究の現状」報告：藤田隆則

「フィールドワーカーとして実感したことを大切にする」という言葉からはじまった谷本氏の報告は、1963年以來のシベリアを中心としたロシア各地のフィールドワークの総括ともいえるべき報告であった。1963年、谷本氏がはじめてシベリアの調査を志してその地に赴いたとき、外国人が現地調査を自由におこなうことができるような空気はなかった。しかし、ペレストロイカをへた現在、シベリアを含むロシアは、豊かな調査対象として、われわれに開かれている。発表は、谷本氏のこれまでの豊富な現地調査経験を、これからの研究課題と連動させるというかたちでおこなわれた。いわば、研究を始める者が、研究対象、フィールド、研究テーマの選定をおこなうための、ありがたい手引きであった。

具体的報告は、各地域に特徴のある音楽・芸能に焦点をあてながらすすめられた。

最初に焦点があてられた地域は、ウラル山脈南部地域である。ここには「長歌」つまり「追分節」にもつながるメロディーをもつ歌が存在する。同類の歌が、バシキル地域にも存在する。後者については、1936年にモスクワの学者がおこなった録音も存在するので、歴史的な研究をおこなうことも可能である。また、「長歌」には、喉歌と共通する技法がみられる。この形式を、モンゴル、東北シベリア、日本の北方にいたるまでの地理的広がりの中からとらえるような研究も可能になるであろう。

次は、ヤクーツク周辺(サハ)である。この地域では、シャーマンが現在も生き生きとした活動をおこなっている。シャーマンが執り行う儀礼の世界は、約一時間の中にも、さまざまな音響を含む世界である。サウンドスケープ研究の宝庫である。

次に、チュクチ地域にうつる。輪踊りが紹介された。ここでは、「ハイ、ファー」という喉声が、動物(あざらし)の声の模倣であることの可能性が指摘され、擬音に焦点をあてた研究の可能性が示唆された。加えて、その地域の太鼓踊り歌が、ソビエト政権下で民族アンサンブルとして生まれ変わっていった過程が紹介された。芸能変化の原動力となるのは、政治の力だけ

ではない。この地域で盛んにおこなわれてきた交易。これが、音楽形式の伝播と変容に大きく作用している。政治と経済とを視野にいたれた芸能変化の研究が可能である。

次。カムチャッカ地域。この地域で興味深いのは、それぞれの社会の構成員が、儀礼で用いるための個人固有の歌を所有していることである。その歌はまた、売買の対象にもなっていて、まるで物品であるかのように感じられる。この点に関連して、谷本氏が強調されたのは、歌の社会的な役割である。歌は、人間関係や出自などをしめす記号として、社会的に機能している。それはわれわれが通常考えるような意味でのコミュニケーションの道具ではないということを、氏は強調された。対象は豊かである。興味深い。しかし、研究活動自体は手薄であるということがよくわかる発表であった。

評者は、民族音楽学の研究者が、豊かな対象に集中的な関心を示さない現状を残念であると思った。その点に関連して評者は、ロシアの民族音楽学の研究者の関心がいったいどこにあるのか、疑問をいだいた。古くロシアは、著名な言語学者や音韻学者を排出し、それが構造主義の深い源となったという過去がある。その過去がなければ、ナティエ氏などによるエスキモーの喉歌の記号論的研究も存在しないのである。民族音楽学の構造主義的な視点や、また谷本氏が本発表の中で提示されたコミュニケーション論的な視点が、ロシアのアカデミズムの中で、ロシアの音楽そのものの豊かさを栄養にしてもう一度息を吹き返したら、民族音楽学はまたまた面白いことになっていくにちがいない。そんなことを考えさせる報告であった。

(2) 森田稔「ロシア音楽研究の現在」

報告：上野正章

ソビエト連邦の崩壊は 20 世紀末の現代世界に計り知れない変化をもたらしたが、ロシア音楽研究においても例外ではない。散逸し、行方が判らなかつた資料が続々と発見され、目覚ましい勢いで実証的研究が進展し、従来の作曲家像が肉付けされて日に日に更新される。本発表はこうしたロシア芸術音楽研究の現在を、作曲家研究の視点から報告したものである。

最初に取り上げられたのはチャイコフスキイ研究であるが、研究の展開が著しい。ドイツ人学者が主導して 1993 年に国際チャイコフスキイ協会が設立され、国を越えての協力体制のもとで研究書の出版や全集出版が繰り広げられている。研究の発展に伴うのが旧来の研究成果の検討である。ポズナンスキーの伝記研究における推測が、実証的な研究によってほとんど正しいことが立証され、研究者達を驚かせた。

ムーソルグスキイ研究においても新全集の刊行など、活発な研究が見られるが、なんといっても驚くべき成果が続出しているのがショスタコーヴィチ研究である。ソロモン・ヴォルコフのいわゆる『証言』によって、社会主義体制における模範的優秀音楽家というイメージが強かつたショスタコーヴィチ像が崩壊したのはまだ記憶に新しいが、近年の続々と報告される新資

料の出現は再度この作曲家像を変化させつつある。作品研究はもちろん、映画音楽研究、インタビュー調査、新発見された作品の初演など多角的で精緻な研究が著しく、従来の限られた資料から作曲家とイデオロギーの関連について推察するタイプの研究は、ひとまず措かれる傾向にある。

こうした一連の流れの研究においてとりわけ注目される研究者が、リチャード・タラスキンである。彼の丹念な資料調査に基づくストラヴィーンスキイ研究は、モダニズムの文脈で語られることが常であったこの作曲家が、実はロシアの伝統に深く根ざしつつ創作を進めていたことを明らかにした。このような活発なロシア音楽研究は音楽史研究においても同様で、『ロシア音楽史 全10巻』の書換え作業が行われている。

世界中のロシア音楽研究者の熱気が伝わってくるような発表であった。そしてまた、ヨーロッパとアメリカにおけるロシア音楽研究の布置を鮮やかに描き出す本発表は、少し離れた極東の日本から世界を鳥瞰するからこそ可能になる。

質疑応答では、ショスタコーヴィチの作品における電子楽器の使用や、チャイコフスキイについての最新の事典記述など、最新の作曲家研究の成果を問う質問が行われた。そして二つの研究発表の後、二人のロシア音楽研究者を前にして総合的な質疑の時間が設けられたが、ストラヴィーンスキイの春の祭典とシャーマニズムについての関連を問うという質問によって二つの発表が橋渡しされ、西洋音楽研究と民族音楽研究の壁が崩れ、ロシア音楽・文化を広く捉えることができたのは大きな幸運であった。

東洋音楽学会関西支部第206回定例研究会報告

と き：2001年10月27日（土）13:00-18:30

ところ：大阪大学・文13教室

テーマ：「日本・インドネシア・台湾」

研究発表

(1) 上野正章「日本の音楽史における現代音楽の記述について」

報告：今田健太郎

西洋音楽史の用語には、援用や転用がなされたり付加価値が与えられたりすることによって、文字通りの意味から独自のコンテクションを得たものがある。「現代音楽」という語はその典型だろう。発表で示されたように、1910年代に田辺尚雄や富尾木知佳らによってはじめて「現代音楽」が描写されたさいには、字義をそれほど外れてはいなかった。が、周知の通り、現在

ではその逸脱をあえて提示するためかカタカナ表記さえみかける。

「現代音楽」の示す範囲やニュアンスが常に揺れ動いてきたこと、そしてそれらは相応のリアリティをもって共有されてきた現実を、過不足なく受け止めようとした発表である。論旨に即してまとめるなら、日本語で書かれた西洋音楽史という、音楽に関する言説としては基幹的なジャンルのなかから、各音楽史家たち（大部分は音楽学者）が「現代音楽」を選択し分類し記述する様子を取り上げ、彼らの音楽理解の基層と変容とを見出そうとする。

発表者によれば、1910年代に登場した田辺らの西洋音楽史では、「現代音楽」は作曲家の出身国名あるいはそれに準じた民族名に沿って項目立てられている。音楽技法や音楽様式は音楽外的な要因（国民性や民族性）を反映したものと説明されており、音響構成の発展を軸にしているとは言いがたい音楽史といえる。より音楽に即した記述は、大田黒元雄らによる音楽評論で展開されていた。

1950年代以降には、柴田南雄に代表されるような、音楽技法を軸とした記述が登場し、また同時に山根銀二らのマルクス主義的な美意識に基づいた音楽史も著される。いずれも表面的には国別分類法から脱したかのようだが、前者では西欧とりわけ米国の前衛音楽が、後者では東欧や中国の音楽がそれぞれ重点的に扱われており、東西国家間の冷戦構造が埋め込まれている。

このような言説の布置を扱った議論に対して、よく「実態」と「記述」の関係が問われるのだが、発表者は「実態」を保留して「記述」のみから広がる世界観を検討したのであって、方法論的には邪な問いかけといえよう。が、問わずにはいられないのも生々しさゆえ。発表者の対応は誠実で、たとえば、柴田は仏語よりも独語に堪能であったことや柴田自身の作曲活動からの影響、そして1950年代以降におけるJ・ケージやミニマルミュージックの存在感の膨張など、「記述」をとりまく状況証拠を挙げた。

また、西洋音楽史以外に音楽を扱う言説のジャンルには他にどのようなものがあったのか、また発表者はそれらと西洋音楽史をどのように分別したのかという問いもあった。これに対して、音楽史といった場合には何らかの軸を設けて編年的に構成されている、他に音楽評論や名曲解説、レコード鑑賞の手引きなどもあり、それらに音楽史的な記述も含まれるが場当たりのなことも多く、比較的明確に線が引ける、という。

私たちが音楽について思考する論理の一端を明らかにしたことは評価されよう。覚めてはいるがあたたかい視線である。

特別講演

(1) ナノ・スラトノ「地方分権化：展望と試み」

報告：福岡まどか

発表者のナノ氏は、インドネシア・西ジャワ州のバンドゥンに在住する、作曲家・演奏家であり、また西ジャワの文化行政に長年携わってきた。今回の発表は、この数年間で劇的な政変を遂げつつあるインドネシアの文化行政の現状に関する分析とともに、芸術活動を行う上での実践的な問題点の提示の双方が見られた。32年間にわたって強力な中央集権体制を推進したスハルト政権は、インドネシアの各地方の文化行政を中央政府の管轄下で統制してきた。経済危機をきっかけにスハルト体制への批判が一気に高まり、1998年に政権は崩壊した。度重なる政権交代の中で、地方分権への流れが決定的となり、文化行政の現状も大きく変わりつつある。このような地方自治のあり方は「地方分権 otonomi daerah」と呼ばれる。1999年に地方分権に関する法律ができ、中央と各地方の予算の均等化が決定された。従来は、中央政府→州→県あるいは市→郡という中央からの規制が地方の末端まで届いていたのに対し、現行の制度では、各地方により大きな権限が与えられるようになった。特に、市長によって指導される市と県知事によって指導される県のレベルに相当する地方に大きな権限が与えられた。これらの各地方では、大きな権限をもつようになった一方で、地方行政機構の変化に伴う人材不足の問題なども抱えており、文化行政は過渡期的な状況にある。

ナノ氏は、西ジャワ政府による積極的な文化活動の可能性を指摘し、以下のような課題を提示した。それらは(1)地方政府が地方の文化、特になくなりかけている伝統芸術を保護する必要性、(2)芸術家の著作権に関する保護の必要性、(3)芸術家の生活環境と芸術活動の需要を高める必要性、(4)芸術に対する愛着を社会の中ではぐくむ必要性、(5)文化・芸術の担当部局に活動予算を設け、部局内に適切な人員配置をする必要性、などである。ナノ氏は、現在のインドネシア経済の停滞のゆえにこれらの課題を克服することの難しさを指摘する一方で、地方分権化によって創作活動が以前よりも自由に行えるようになり、高い創造性を追及できる可能性があるとの希望も提示した。質疑応答では、村落レベルでの地方における伝統芸術家の活動状況について、また芸術家の創作活動を政府が規制する問題などについて、活発な議論が交わされた。

(2) メルセデス・ドゥフンコ「潮州弦詩における旋律のバリエーション・地域のアイデンティティ・意味 (Melodic Variation, Regional Identity, and Meaning in the Xianshi String Ensemble Music of Chaozhou, South China)」

報告：藤田隆則

南中国の潮州で現在もおこなわれている弦楽アンサンブル、Chaozhou xianshi (潮州弦詩) を対象とした、オーソドックスな民族音楽学的研究であった。配布資料は充実しており、プレゼンテーションも親切。面白い発表だった。寺田吉孝氏の手際よい司会ぶりが、質疑応答を活性

化させた。聴衆が10名を切る少なさであったことが惜しまれる。

Chaozhou xianshi (潮州弦詩) は、単純な旋律が延々と繰り返される音楽であり、人によっては単調で退屈な印象を受ける音楽である。その音楽の特質を明らかにするため、ドゥフンコ氏はまず、Chaozhou xianshi (潮州弦詩) の演奏において重要なことは何かを明らかにしようとする。

Chaozhou xianshi (潮州弦詩) の代表的な形式が、一曲の演奏で30分以上かかる dataoqu (大套曲) である。曲の始まり部分では、4/4の拍子に乗せて、旋律が演奏される。そのセクションが済むと、拍子が2/4となり、旋律を構成する音と音の間に装飾音が挿入され、旋律の動きは細分化される。曲はさらに進み、次に、拍子が半分の1/4となる。装飾音が増え、旋律はより細かくなる。これに応じてテンポも上昇する。このようなテンポと拍子のバリエーションには、touban (頭板)、erban (二板) などの名称が、それぞれに付けられている。dataoqu (大套曲) の演奏においては、ban (板) の進行と変化が、最も重要な構成原理となっている。

ban (板) の進行と変化によって、最初の旋律に対するバリエーションが次々と生みだされていく。旋律のバリエーションを生みだすことの意味や価値は何か。それを解釈すべく、ドゥフンコ氏は、儒教道徳に由来する fugo (復古) 思想、さらに潮州人のステレオタイプ (「保守性」「団結性」「巧妙さ」など) に話を進めていく。fugo (復古) 思想の下では「伝統のしぼりの中に留まることが求められる。その一方、個人的で新しい何かを付け加えることも求められる。このジレンマを解決する場所が、バリエーションなのである」とドゥフンコ氏は考える。旋律のバリエーションを、fugo (復古) のための手段と解釈するのである。

さらに氏は、旋律のバリエーションを生みだす構成原理と類似した手順が、ポットを使って gongfucha (功夫茶) を入れる場面にも認められるとし、実例をビデオで示した。手順の類似性を根拠として、音楽演奏の中には文化の「coherence (一貫性)」(A. Becker 氏の概念) が表出されているということを述べた。そして、類似性 (あるいは iconicity) そのものが、潮州人の文化的なアイデンティティを構成しているということを指摘して、結論とした。しかし評者には、両者の類似性そのものの具体的説明が不十分であるように感じられた。

1時間弱のコンパクトな発表だったにもかかわらず、音そのものの構造を十分に記述・分析しつつ、音楽構成原理の社会的な意味を解釈しようとする、そのバランスの良さに、好感をいだいた。氏による分析そして解釈の結果は、今後フィールドに返されていった後、どのように作用していくのだろうか。興味深い。

♣♣♣ 関西支部からのお知らせ ♣♣♣

● 関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

関西支部では、定例研究会での会員相互の活発な活動を期待しています。研究発表等は下記の宛先にお申し込み下さい。その際、発表の種別（研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など）、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記して下さい。

関西支部定例研究会発表申し込み先

〒656-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館
寺田吉孝（例会・広報担当理事）研究室気付
e-mail: terada@idc.minpaku.ac.jp

● 入会申し込み方法・住所変更について

入会ご希望の方は 80 円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせください（関西支部ではお取り扱いしておりません）。

〒110-0001 台東区谷中 5-9-25 第2八光ハウス 201号
（社）東洋音楽学会
tel:03-3823-5173 fax:03-3823-5174 e-mail: LEN03210@nifty.ne.jp

（社）東洋音楽学会関西支部

〒580-0033 松原市天美南 1-108-1 阪南大学南キャンパス 櫻井研究室気付
e-mail: sakurai@hannan-u.ac.jp